

2019年度

時間50分 100点満点

第一回 一般入試

# 国語

## 受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 実施時間は50分で、100点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3. 解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4. 解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5. 試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6. 私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 \_\_\_\_\_ 座席番号 \_\_\_\_\_

名 前 \_\_\_\_\_

聖学院中学校

問題は次のページからはじまります

問一 次の——の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① この仁王像は鎌倉時代につくられたものだ。
- ② 時間を割いてしつかり議論する。
- ③ お客様からの注文を承る。
- ④ 昔助けてもらった恩に報いる。
- ⑤ 長い年月を費やして復興を果たす。
- ⑥ 祖父と言葉を交わしていた頃がなつかしい。
- ⑦ 村のお地蔵様に花を供える。
- ⑧ 博識な人の話を聞くのは面白い。
- ⑨ 故郷の著しい変化に驚きの声を上げる。
- ⑩ 真面目な彼ならば議長に推すことができる。

問二 次の——のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ケイガイ学部への進学を希望する。
- ② 自分の意見をカンケツに主張する。
- ③ キヌ織物はこの土地の名産だ。
- ④ 自分の解答を何度もケンザンして確かめる。
- ⑤ サトウを大量に使ってお菓子を作る。
- ⑥ 陸上部の彼はシンパイ機能に自信がある。
- ⑦ クローゼットに荷物をシュウノウする。
- ⑧ 世界各国をレキホウする。
- ⑨ 子どもの顔がノウリに浮かぶ。
- ⑩ ユウシュウな成績をおさめて、得意になる。

□ 次の文章を読んで後の間に答えなさい。(、や。なども一字とします)

祭から帰ると、伯父<sup>おじ</sup>さんが花火を用意して待っていてくれた。縁側<sup>えんがわ</sup>で父ちゃんと母ちゃんと伯父さんが見ているなか、庭で由真と花火をした。青や黄色や赤の炎がきれいで、次々と新しい花火に火をつけていった。

「征人<sup>ゆきと</sup>は中学生になっても、花火が好きだねえ」

① 母ちゃんが笑いながら言い、そのちよつとばかりにしたような言い方に、とたんにつまらない気分になる。

「征人、由真。線香花火で勝負しよう。最後まで火種が残った人が勝ちね」

突然、父ちゃんがそんなことを言い出した。驚いた。明日、島に雪でも降るんじゃないだろうか。それとももしかして父ちゃんは、( ② ) いつもと同じ表情からは、なにも読み取れなかった。

「せつかくだから、家族みんなでやればいいさー。おれが審判ね」

伯父さんが言って、母ちゃんを促<sup>うなが</sup>し、母ちゃんもその気になって庭に降りた。

みんなで一斉に、ろうそくで火をつける。

チチチ、チチ、チチチ。

火花のはぜる、小気味よい音がする。こんなに小さく頼りないこよりから、こんなにもいろいろな模様の火花が散るの

が不思議だった。消えそうになったと思ったら、ふいに大きくオレンジ色の線を伸ばし、パチパチと四方八方に絡まるように枝を広げてゆく。かと思ったら、情けないほどおとなしく勢いを落とす。

「あっ！」

由真の火種がぼとりと落ちた。

「あーあ」

と言って、由真が急に立ち上がる。そのせいで、今度は母ちゃんの火種も落ちた。

「あら、残念」

母ちゃんがちっとも残念そうじゃなく言う。

「政直と征人の勝負だな」

伯父さんの言葉に、父ちゃんが薄く笑った。父ちゃんの火花は、最初からずっと大きくとても豪華だった。おれのは、小さくなったり大きくなったりを繰り返して、不安定この上ない。

ぽとつ。

なんの前触れもなく、父ちゃんの大きな火種が落ちた。

「はい、征人の勝ち」

伯父さんが言った瞬間、おれの火種もすうつと地面に吸い寄せられるように落下した。みんなの笑い声がした。おれも笑ってしまった。

「一位の征人には、おいしいアイスキャンデーがあります」

「えー、うそー」

由真が伯父さんに抗議する。

「ははは。ビリの由真にもあるさー」

伯父さんがアイスを五本持ってきた。あら、大人も？ と言いながら、母ちゃんが受け取る。父ちゃんもさっそく袋ふくろを開けていた。五人で小さな縁側に腰かけながらアイスを食べた。水色のソーダのアイスはとてもつめたくて、歯がキーンとした。

花火のあと、疲れたのか、由真は早々に寝てしまった。父ちゃんと伯父さんは昨日と同じように飲んでる。父ちゃんも普段飲まないけれど、実は強いほうだと思おう。たまに飲んでも、酔よったところを見たことがない。伯父さんは、ほろ酔い加減で少し饒まいしょうぜつ舌ぜつになっっている。

「征人。お前も少し飲むかあ」

おれの返事を待たずに、伯父さんが小さなグラスに注ぐ。これまでも舐める程度のことではあったけれど、お酒なんてぜんぜんおいしくない。

「うへえ……」

顔をしかめると、そのうちこれが旨く感じるようになるさー、と伯父さんは笑った。

「征人と酒を飲める日が待ち遠しいなあ、政直」

③伯父さんが父ちゃんに言い、そうだなあ、と父ちゃんが目を細めた。

「征人が高校生になったら、さみしくなるな」

高校は本島にしかないから、高校生になったら寮生活となる。

「征人は賢いから、医者にでもなるか？ それか、弁護士先生か」

たのしそうに伯父さんが言う。

「そんな頭、あるわけないさー」

母ちゃんが口を出し、おれはまたちよつとムツとした。

「父ちゃん」

「ん？」

「おれ、東京行きたい。東京の大学に行きたいさ」

なんの前触れもなく、おれの口から言葉が勝手に出ていた。みんなが一斉にこつちを見る。④言つた自分が、今いちばん驚いている。

「おお、そうか。東京の大学か。いいじゃないか。なあ、政直。末は大臣だぞ」

父ちゃんはなにも言わないで、お酒を口に含む。

「また、おだてんでくださいよ。大学なんて行つたつて、たかが知れてる」

母ちゃんがまた口を挟んだ。

「おれ、いっぱい勉強して国立大学を目指す。だからいいでしょ。東京に行つても」

「征人は将来、なんになりたいのか」

伯父さんの問いにすぐには答えられなかった。なにになりたいかなんて、わからない。将来の夢なんてまだなにもない。

今のおれの夢は、東京に行くことだ。



黙だまってしまったおれに、

「目的もなく世に、東京に行きたいなんて」

と、母ちゃんが不満げに言う。

「……おれ、東京に行きたいさ」

⑤もう一度そう言ったら、なんだか胸がいっぱいになってしまった。これ以上言葉を口にしたら、涙なみだがあふれてしまいうるさかった。

「征人が行きたいところに行けばいい。先のごことは、行ってから考えればいいさ」

これまで黙だまっていた父ちゃんが口を開いた。おれは父ちゃんの顔を見た。やさしい顔かほをしていた。うれしいはずなのに、その顔を見たら、どういうわけかもっと泣きたくなってしまった。

「……あ、ありがとう」

それだけ言うのが精一杯だった。目の前がふいにぼやける。おれは慌あわてて立ち上がって、後ろ手にふすまを閉めた。

隣となりの部屋に入ったとたん、こらえきれずにふわっと涙が出た。涙はあとからあとからどんどん出てきた。Tシャツの肩部分だけでは足りなくて、お腹の生地をめぐって涙をぬぐった。

父ちゃんが、望み通りの言葉を言ってくれたというのに、なにかに負けたような気分だった。父ちゃんを傷つけたと思  
った。

ごめんなさい、ごめんなさい。おれは心のなかで、何度も何度も謝ったのだった。

（椰月美智子『14歳の地平線』）

\*1 饒舌……おしゃべりになること。

問一 ― ①について、征人は母親の言葉をどのように受け止めていますか。その説明としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、自分の好きなことをばかにしている。

イ、自分のことを子どもあつかも扱いしている。

ウ、自分の気持を見透みすかしている。

エ、勝手に自分の気持を決めつけている。

問二 ( ② ) に入る一文としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、虫の居所がわるかったのだからか。

イ、嬉しいことでもあったのだからか。

ウ、なんの気なしに言ったのだからか。

エ、おれを気遣ってくれたのだからか。

問三 — ③について、「父ちゃんが目を細めた」とは「父ちゃん」のどのような気持ちを表現していますか。説明として  
もつともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、息子の成長に驚き、戸惑いとまどを隠かくせないでいる。

イ、息子の成長に気づかなかつたことを恥じ、照れ隠しをしている。

ウ、息子の成長を喜び、将来を楽しみにしている。

エ、息子の成長がしみじみと感じられ、昔を懐なつかしんでいる。

問四 — ④について、征人はどのようなことに驚いているのですか。説明としてもつともふさわしいものを選び、記号  
で答えなさい。

ア、この場で言うつもりでなかった言葉が自分の口について出たこと。

イ、なんの気なしに言った言葉によってその場の雰囲気ふんいきが一変したこと。

ウ、覚悟していった言葉であるのに自分自身がおじけづいていること。

エ、母の言葉に腹を立てて言い返した言葉に皆が予想外の反応をしたこと。

問五 — ⑤について、この時の征人の気持ちの説明としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、自分をこれまで育ててくれた父への感謝。

イ、自分の願いを聞いてくれない母へのいらだち。

ウ、自分を気遣ってくれる伯父さんへの期待。

エ、自分の想いを言葉で表現できない感情の高まり。

問六 登場人物の説明としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、「父ちゃん」はあまり自分の考えや感情を表に出す人間ではないが、息子である征人から深く慕われ、尊敬もされている。

イ、「征人」は東京でやりたいことが明確にあり、それを行うためにも両親に東京行きをどうしても許してもらいたいと思っている。

ウ、「伯父さん」は主人公の家族の顔を常にうかがい、その場の雰囲気を良いものにしようと懸命に空気を読んでいる。

エ、「母ちゃん」は主人公をまだまだ幼稚であると見下し、これからもずっと家族と一緒に生活すべきだ、と考えている。

問七 この文章の特徴の説明としてふさわしくないものを選び、記号で答えなさい。

ア、主人公の征人の眼を通して登場人物の心情や様子が描かれ、特に征人にとって大きな存在である「父ちゃん」の挙動が細やかに描かれている。

イ、祭りの後の「線香花火」の様子には、『征人が父親をどのように思っているのか』や『進路に思い悩んでいる征人の心』が暗に示されている。

ウ、「チチチ、チチ、チチチ」や「パチパチ」など音を表す言葉や様子を表す言葉が多く使われることで、臨場感が生まれている。

エ、登場人物の言葉に方言が多用されることで、共通語では表現しきれない感情の細かな部分が表現できている。

問八 ……について、この時の「父ちゃん」の胸の内には単純な一つの感情だけでなく、さまざまな思いが混ざりあっていたと考えられます。「父ちゃんの胸の内」を想像し、「父ちゃん」の「気持ち」を二つ答えなさい。

③ 次の文章を読んで後の間に答えなさい。

「仕事」というのは、実に多くの意味で使われている言葉である。たとえば、僕のような理系が最初に思い浮かべるのは、力と距離きょりを乗じて得られる物理量である。だから、仕事というと、ワークよりもエネルギーを思い浮かべてしまう。しかし、この本で使われる「仕事」はそうではない、働いて金を儲ける行為のことだ。

働くだけの仕事というものもある。たとえば、部屋の整頓せいとんをするとか、庭掃除にわそうじをするとか、洗車するといった作業である。こういったものを「仕事」と言う人もいるし、いやそれは仕事じゃないでしょうと言う人もいる。しかし、テレビを見るとか、ライブに出かけるというのは、明らかに仕事ではない（なかには仕事の人もいるけれど）。

部屋の整頓が、テレビを見るのと同じく違ちがうのかといえば、それは「やりたくないけれどやらなければならない」かどうかにあるだろう。微妙なところだが、だいたいこのあたりに線引きがありそうだ。（A）、仕事というのは、抽象的に表現すると、「したいという気持ちはそれほどないけれど、それをしないと困ったことになるからするもの」ということになる。「金を儲ける」というのも、金がないと生活に困るからである。したがって、この定義でカバーできるだろう。

（B）、「したい」という気持ちがある仕事もある。やる気満々で仕事をする人がけっこういるようだ（部屋の整頓だって大好きだという人がいる）。「仕事が生きたい」と嬉しそうに語る人だっている。どうしてそんなことを自慢じまんする

のかよくわからない。ただ「仕事は辛いもの」という常識があるからこそ自慢になるわけだ。もう少し詳しく分析すると、仕事の中に楽しみを見つけている、というだけのこと、仕事が全面的にすべて楽しいという意味ではないはずだ（なにしろ、休日には仕事を休んでいるのだから）。（C）、本人が自己暗示にかけて、「これは楽しいことなのだ」と自分を騙している場合もときどき見受けられる。仕事が楽しいと語っていた人が、次に会ったらその仕事を辞めていたというケースが多い。（D）、目が醒めたのだろう。

（中略）

①仕事の定義の次に考えたいのは、何故ここまで仕事というものが人間にとって大きな存在になったのか、という点だ。もう少し噛み砕いていうと、「仕事ってそんなに大事なの？」という、恋人とか子供とかがだだをこねて言いそうな台詞にもなる。

古来、人間の価値というのか、偉さというのか、社会的な立場というのか、ようするにその人物が「何様か」ということが、その人がしている仕事でだいたい決まっていた。それくらい職業というものは、人の価値を決める重要なファクタだったのだ。

どうしてそうなったかという、やはり、「稼ぎ頭」という言葉が示すとおり、仕事をしている者が家族を養っている、



という「見た目の不可欠さ」がまずある。これは、たとえば、ある村で一人しかいない医者だったら、その人は村人の命を預かっている仕事をしていることになる。これも「不可欠さ」だ。自然にみんなから先生と呼ばれて尊敬される立場になるだろう。

一方では、仕事で金を稼げば、その金を使うことによつて、周囲の者が潤う。言葉は悪いが、おこぼれをいただくような感じに見えなくもない。金が集まるところには、人も集まる。だから、どんな仕事をしているのか、その仕事でどのくらい稼いでいるのか、ということが人間の価値だと認められやすい社会が長く続いたのである。

階級社会というものが世界のどこにでもあつて、そこでは自由に職業を**選択**できない。日本でいえば、かつては武士は武士であるし、農民は農民だった。どんな仕事に就けるかが、差別の対象となつているわけだ。勝手に職業を変えられては、社会の秩序が崩れてしまう、と考えられていた時代だった。

本当に、つい最近までそうだったのである。この方面に詳しくないので、いい加減な印象で書くが、数十年前まで、②そういう社会は世界のどこにでもあつた。実は今でも、まだどこにもあるけれど、先進国では少なくとも憲法というものが出て、「人は皆平等である」と定められた。そもそもこのように憲法というものを持ち出さないと守れないほど難しい認識だった証拠である。今では当たり前のことが非常識だった、といつても良い。

仕事によって上下があったのと同様に、仕事をしている者は、仕事をしていない者よりも偉かった。たとえば、投票権があるのは一定の稼ぎがある者たちだけだったりしたのだ。これも立派な（悪しき）差別である。仕事をしている人たちだけで民主主義が行われ、議会で物事が決まったのだから、自分たちの立場の「偉さ」を守ろうという方向に自然になる。奴隷どれいとか、女性には、偉くなってほしくない、という法律ができてしまう。だからこそ、単純な多数決かたよでそのような偏った暴走が起らないように、理想の精神というものを憲法に謳うたったわけである。③自分たちがときには間違まちがったことをしてしまふ、と知っていただけでも、人間は素晴らしい。

これと同じように、個人のレベルでも憲法のような理想の精神を持っていなければならない。空気を読んで周囲の多数決について流されてしまうのは、民主主義の欠点を取り入れているようなものだ。「人間の価値は仕事とは無関係だ」という憲法（理想）を自分の中にしっかりと持って、ときどき、これに反していないか、と確認しなければならないだろう。世間では実際問題なかなか理想どおりにはいかないけれど、でも本当はこうなんだぞ、という信念を持っていることが大切だと思ふ。

子供は、たしかに参政権がない。これは差別されているというわけではなく、子供はまだよく物事を知らないためだ。子供はみんな例外なく大人になる。しかし、女性は、成長して男性になれるわけではないのに、長い間、参政権が与えら

れなかった。そういう不公平がほんの数十年まえまで当たり前のように存在していた。

僕が子供のときには、「ウーマンリブ」という言葉が流行<sup>はや</sup>っていて、男女平等の精神の下、女性も社会進出すべきだという主張が展開された。

まず、男女いずれであっても、自由に就職できる機会があることが大事だと思う。けれども、女性が男性と対等になるためには就職をして社会に出なければならぬ、という主張は、ちよつとずれていると感じる。たとえば、主婦というのは、社会へ出ていないのだろうか、という疑問もある。結局これは、「男は仕事しているから偉い」という認識をベースにしているから、そう考えてしまうわけだ。本当は、男女平等と仕事は別問題のはず。仕事をしていても、していなくても、男と女は対等でなければならない。

ただ、④そういう誤解が生じるくらい、やはり「仕事は人間の価値を決めるものだ」という社会的な認識が根強かったといえるだろう。

(森博嗣 『「やりがいのある仕事」という幻想』)

\*1 抽象……いくつかの事物に共通なものを抜き出して考えること。

\*2 ファクタ……「要因」や「要素」という意味の語。

問一 (A) (B) (C) (D) にはいる語としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、きつと イ、また ウ、つまり エ、ところが

問二 — ①について、次の間に答えなさい。

(1) 筆者の考える「仕事の定義」とはどのようなものですか。文中より十字でぬき出しなさい。

(2) 「仕事」が人間にとって大きな存在になった理由を筆者はどのように考えていますか。その説明としてもつともふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア、その人のひたむきに仕事に向き合う健気な姿勢に周りの人々が感動したから。

イ、仕事をしている人のそばにいたいと思いがけない幸運を得ることができたから。

ウ、真面目に仕事をする<sup>たが</sup>ことでお互いの信頼関係<sup>しんらい</sup>が築かれると考えられていたから。

エ、仕事をしなければ生きていけないという思い込みに支配<sup>こ</sup>されていたから。

オ、その人の仕事<sup>しごと</sup>が周囲の人々にとってどうしても不可欠であると考えられたから。

問三 ――②について、「そういう社会」とはどのような社会ですか。文中より十二字で、最後が「く社会」となるようにぬき出しなさい。

問四 ――③について、「自分たちがときには間違ったことをしてしまう」とありますが、筆者はどのようなことを間違いだと考えていますか。「間違いの例」としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、クラスの中でいじめがあるのを見て見ぬふりすること。

イ、遊んでばかりいて勉強に全く手をつけないこと。

ウ、夜ふかしをして何度も遅刻ちかくしてしまうこと。

エ、SNS上で友達の陰口かげぐちを言いあうこと。

問五 ――④について、「そういった誤解」とはどのようなものですか。三十字以上三十五字以内で文中から見つけ、最初の五字を答えなさい。

問六 この文章で筆者が言っていることとして正しいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア、「仕事」という言葉には様々な使われ方があり、同じ言葉でも受け取る人が違ふと意味が変わってしまうことがある。

イ、現在の世界ではなくなったが、過去、世界のどこにでも「階級社会」というものがあり、人々の自由は制限されていた。

ウ、私たちは、憲法に書かれている「理想の精神」というものを個人の生活の中でも体現していくべきである。

エ、男女平等の社会を実現するためにも、男女の差別なく働くことができるようにならなければならない。

オ、これからの社会は「仕事」ではなく、その人の持っている「魅力」がその人の価値を決めるようになるべきだ。

三						二								一					
問六	問五	問四	問三	問二		問一	問八		問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問二		問一	
				2	1	A										⑥	①	⑥	①
						B										⑦	②	⑦	②
						C										⑧	③	⑧	③
						D										⑨	④	⑨	④
			社会													⑩	⑤	⑩	⑤
							気持ち	気持ち											

受験番号
座席番号
名前

2019年度
第一回 一般入試
国語・解答用紙
聖学院 中学校